



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	W.ジェイムズにおける「未分類の残余」への視点と「宗教」概念の再構成
Author(s)	堀, 雅彦
Citation	北大宗教学年報, 2, 26-32
Issue Date	2019-08-31
DOI	https://doi.org/10.14943/90376
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75429
Type	departmental bulletin paper
File Information	hil_reli_2-3.pdf



【研究ノート】

W.ジェイムズにおける「未分類の残余」への視点と 「宗教」概念の再構成

堀 雅彦

はじめに

本稿は、2018年12月に東京大学で行われた研究会——「宗教学生成期における哲学の位置」¹——での発表をもとにしたものである。堀の発表は、ウィリアム・ジェイムズ（William James 1842-1910）の哲学的（かつ神学的）営みとしての「宗教の科学」に注目し、その対象と方法の側面から、彼が描き出そうとした「宗教」の姿の再構成を試みるものであった。後日の考察を加えて行った北大宗教学研究会（2019年2月18日）での報告内容も含めて、以下、その概要を研究ノートとして記す。

1 「未分類の残余」への視点

ジェイムズにおける哲学と宗教の関係は、彼自身の問題意識としては「哲学は宗教に対しいかなる貢献ができるのか」という形で問われる。その問いの答えは、さしあたり『宗教的経験の諸相』（以下『諸相』）の第18講、「哲学」において、次のように示されている。すなわち「宗教を不健全な私秘性から救い出し、それに公的な地位を与え、その表明へと通じる道に関して万人の権利を与えること」、それが、宗教に対して果たすべき哲学の役割だと彼は述べている²。

宗教が「不健全な私秘性」とどまりがちだとジェイムズが考えるのは、彼がその根幹を人間の理性よりも感情に見ているからである。「感情は私秘的で物言わぬものであり、自分自身について説明することができない」。「自らのもたらすものが謎や神秘にとどまることを許し、それを合理的に弁明することを厭う。逆説や不条理と見なされるものを残すことを、時に望みさえするのである」³。そのような感情に根を持つがゆえに、宗教もまた同様の性質を少なからず帯びることになる。

このような彼の宗教観は、宗教の十全な理解という観点からは主情主義に偏するものとして（「全人的」理解に欠けるものとして）批判されてきた。しかし、その批判の妥当性はここでは本質的な問題ではない。いまは彼の関心が宗教の理解よりも宗教の弁護にあり（その意味では「神学的」性質のものであり）、それが感情の私秘性という、いわば宗教の「弱み」の認識に立つものであることを確認しておきたい（もちろん、それが単に弱みでしかな

いのかどうかは議論を要する)。

宗教の弁護という役割を果たすために、哲学は方法の面で積極的に「科学的」になる必要があるとジェイムズは言う。つまり「形而上学と演繹を棄てて批判と帰納に」向かうべきであり、宗教との関わりにおいては自らを神学から（諸）宗教の科学（science of religions）へと変貌させなければならないと言うのである⁴。ここでジェイムズが構想している「宗教の科学」が、その方法においては科学性を志向しつつも、その目的においては神学的な性格を保持していることに注目したい。すなわち、それは「宗教学生成期」に胎動した学問的潮流の一部を構成するものの、その後のいわゆる「記述的研究」としての宗教学（それが厳密には存在せず、むしろ理念に過ぎないとしても）と単純には重ならない。もちろん、science of religions と呼ばれている以上、それを一般的な慣例に従って「宗教学」と訳すことは可能なのだが、ここでは彼が「科学」という言葉に込めた含意を探るためにも、この言葉を残しておきたい。

ジェイムズが「科学」に込めた思いは、方法としての科学に対する多大なる信頼や期待と同時に、現実の科学者たちの姿勢に対する一貫した批判からも、うかがい知ることができる。ジェイムズによれば、科学的発見の種は常に「未分類の残余」(unclassified residuum)にある。ところが、科学者たちはしばしば事実よりも理論を重んじ、それを無視してしまう。「予知、靈感、悪霊憑き、幽霊との遭遇、トランス、忘我（エクスタシー）、奇跡的治癒、他者を病にかからせること」など、「一般に神秘的 mystical と言われる一群の現象」はそのように捨て置かれた残余の最たるものである。ただ心霊研究（psychical research）のみが、それを正当に扱おうとしている、と彼は言うのである。⁵

もちろん、その種の現象がただちに「宗教」の一領域を占めるわけではないことは、ジェイムズ当人も明確に認めている。しかし、その解明は「宗教の科学」（改めて言えば、哲学による宗教への寄与）にとって極めて重要な意味を持つと彼は考えている。つまり「宗教の科学」は心霊研究との協力を拒んではないのである⁶。このような彼の見解をふまえるならば、彼が周囲の反対をものともせず、心霊研究が広義の心理学の一部、それゆえ科学の一部として迎え入れられるために生涯尽力したことも、決して理由のないことではないことがわかる⁷。

2 『諸相』と心霊研究の連続性

実際、『諸相』のジェイムズは、明示的にはそこでの対象を「宗教的という以外の形容に誰も誘惑を感じないような」経験に限定する、としながらも⁸、その分析においては通常の心理学以上に心霊研究の成果を旺盛に導入している。その点において、『諸相』はたとえば

同時代のスターバックらの「宗教心理学」とは一線を画する、敢えて言えば「異様な」性格を持つ書物と言える。

たとえば、そこで繰り返し用いられている潜在意識についての理論、また、その領域を示す「サブリミナル」という言葉は、心霊研究者にしてジェイムズの親友でもあったフレデリック・マイヤーズ（ギフォード講義＝『諸相』のもととなった講義の直前に死去）に依拠するものである。ジェイムズはマイヤーズを一級の心理学者として称賛しているが⁹、これはもちろん、当時も現在も一般に受け入れられる見方ではない。

また、精神医学史研究のユージン・テイラーの指摘によれば、『諸相』には彼が1896年に行ったローウェル講義の資料が数多く用いられているという¹⁰。これはジェイムズが「例外的心理状態」をテーマに行った連続講義である。各回のトピックは「夢」「催眠」「自動現象」「ヒステリー」「複数人格」「悪魔憑き」「魔術」「退化」「天才」といったもので、一般的には異常心理学や精神医学に関する講義と位置づけられているが、その内容は医学的というよりはむしろ、心霊研究に対する彼の関心の強さを濃厚に反映するものであった¹¹。

良く知られるとおり、『諸相』のジェイムズは、個人における宗教的経験の「根と中心」は「神秘的意識状態」にある、と述べているが¹²、これは必ずしも宗教的に権威づけられた神秘体験にのみ見られる意識状態ではない。むしろ先述の意味での「神秘的」現象、つまり侮蔑的な含意で「神秘的」と形容されてきた諸種の「残余」的現象にも通底する状態である。つまり、ジェイムズ自身がさしあたり「宗教」の外に置いたはずの現象と共通の要素が、「宗教的という以外の形容に誰も誘惑を感じないような」現象の核心に見いだされるという、一種のねじれがここにはあると言えよう。

このねじれを通して、ジェイムズにおける「宗教の科学」は、「宗教」のみならず、否それ以上に、諸々の「残余」的現象をも「不健全な私秘性から救い出す」試みとなっている。それは彼が心霊研究の擁護に際して用いた表現を借りるならば、残余を切り捨てる「科学的・学問的な心」(the scientific-academic mind)とは対照的な、「女性的・神秘的な心」(the feminine-mystical mind)の救済を目指す試みでもあった。この場合、前者が現実の科学者らの姿勢を揶揄する表現であり、彼自身の推奨する「科学的」態度とはむしろ対立するものを指すことは言うまでもない。また、「女性的」とされている背景には、心霊研究にとって不可欠な霊媒 (medium) という存在の多くが女性であったこと、また、その実験の場である交霊会自体が、制度化された宗教や学問の場よりもはるかに女性が積極的な役割を担う場であったことが強く反映している¹³。

このような事情からすれば、ジェイムズが「不健全な私秘性」から救い出そうとした現象は、エマソン、ホイットマン、ルター、バニヤン、トルストイ、等々、多くの『諸相』読者

の目を引く宗教的「天才」たちの経験のみならず、交霊会への参加者に代表される無名・匿名の人々の経験でもあったと見るべきだろう。特にジェイムズが晩年までこだわり続けたパイパー夫人による霊媒現象——彼はそれを多くの職業霊媒によるペテンとは異なるものと考え、「パイパー現象」と呼ぶほどに特別視していた——は、その意味で彼が最も救い出したかったものの一つだったはずである。

このような見地に立つとき、われわれは諸種の「未分類の残余」の中にも広義の「宗教」現象として捉えうるものがあることに気が付く。少なくとも、それらの残余を頑迷なまでに「宗教」から排除することは、ジェイムズ自身も望むところではないはずである。というのも、そのような頑迷さは、後年の哲学的著作においてジェイムズが「主知主義」と呼んだ態度に属するもの——「ある名称を扱う際に、その名称の定義によっては積極的に包摂できないような事柄を、その名を与えられた事実から排除してしまうこと」——にほかならず、それを彼は徹底して批判したからである¹⁴。

3 「宗教」概念の再構成

もちろん、『諸相』のジェイムズが明白に「宗教的」な経験として扱っているものと、たとえばパイパー現象をはじめとする霊媒現象の間には、以下のように歴然たる差異があることを無視するわけにはいかない。すなわち、宗教的経験において想定され、信じられるのは「神的なもの」とのつながりであるのに対して、霊媒現象において想定され、信じられるのは「死者」とのつながりである。また、『諸相』で扱われている限りでの宗教的経験が、主に孤独状態での個人的経験であるのに対して、霊媒現象は交霊会という特殊な場での集団的経験として観察されている。すなわち、その種の現象は「霊媒」とされる人物単独では惹起されず、その人物と参席者の双方が揃っている時にのみ観察される。霊媒現象の当事者は「霊媒」以上に参席者（sitters）であり、その中心となるのは多くの場合、亡き人との対話を切に願う遺族なのである。

しかし、一方においてジェイムズが、宗教的経験と霊媒現象を同一の観点から理解し、それゆえ一定の共通性を持つ説明をそれらに与えていることも見落としてはなるまい。

まず、両者はいずれも人間の潜在意識という同一の心理機構に支えられていると彼は見ている。しかも、彼がいずれの現象についても、潜在意識に起因するとは断定していない点にも注目したい。すなわち、彼は宗教的経験については潜在意識「を通過して」到来する、と述べるにとどめ、広義の神の介在の可能性を否定してはいない¹⁵。霊媒現象についても、この不可解な現象の秘密の鍵を潜在意識に求めつつも、一つの仮説として、何らかの外部から人間と「交信しようとする意志」の介在の可能性を提示している¹⁶。

次に、両者がともに当事者に「救い」をもたらす現象である点にも注目したい。『諸相』結論部においてジェイムズが、宗教的経験がたどる一般的な過程を「更なるもの」(MORE)との合一による「救い」として抽出したことは、良く知られていよう。他方、霊媒現象がそこに参加する人々、特に大切な人を失った遺族にとっては無視できない救いとなったであろうことも、想像に難くない¹⁷。今日の死生学の用語を借りれば、ジャンケレヴィッチの言う「二人称の死」と、それにともなう悲嘆(グリーフ)という主題がここにはある。実際、ジェイムズは初期の論文「信念の心理学」(1889年)においてすでに、次のように述べている。「不死性を妥当化する最も確かな根拠は、われわれの腹の奥底から湧き上がる亡き人への思慕である」¹⁸。

本稿の冒頭に見た「感情」に対するジェイムズの基本的見解が、そのような思慕や悲嘆にも適合することにも注目すべきであろう。繰り返しになるが、感情は「私秘的で物言わぬものであり、自分自身について説明することができない」。「自らのもたらすものが謎や神秘にとどまることを許し、それを合理的に弁明することをいとう。逆説や不条理と見なされるものを残すことを、時に望みさえする」のである。こうした感情の特質に根を求める点でも、宗教現象と霊媒現象に対してジェイムズが向ける関心の間には明白な一致があると言えよう¹⁹。

結び

以上から、ジェイムズが「宗教」について論じた事柄の全体を、「未分類の残余」たる霊媒現象その他についても適用可能なものとして捉えなおす必要があると私は考える。その時におぼろげに見えてくる「宗教」の姿こそは、「徹底した経験論」(radical empiricism)に立つ哲学者ジェイムズが既存の概念的・理論的な枠組みを超え、「事実」を通して描き出そうとしたものであろう。

本稿の考察の出発点は、冒頭に記した通り「宗教学生成期における哲学の位置」という共同研究のテーマだったが、ジェイムズ固有の問題関心から言えば、逆に彼の哲学における宗教論の位置を問うことも重要であろう。彼にとって哲学は「世界に関する最も完全な知識」を求める営みである²⁰。名だたる宗教的「天才」の経験について考察を深めることも、不可解な霊媒現象の謎に立ち向かうことも、等しくその意味での哲学の一環をなす。そうした事象に「公的な地位を与え、その表明へと通じる道に関して万人の権利を与えること」は、彼にとって、広義の宗教に対して哲学がなす貢献であると同時に、宗教が哲学に寄与するためにも果たすべき課題であったと言えよう。

実際、主知主義に抗い、広義の宗教を彩る多様にして時に異様な事実を虚心坦懐に見つめ

る視線は、やがては一切の言語的分節化に先立ち、あるいはそこから零れ落ちる「残余」としての純粹経験へのまなざしの生成と呼応し、彼の哲学そのものの発展に通じていくことになるのである（その洞察はさらに海を越え、西田幾多郎の哲学や夏目漱石の文学に大きな影響を与えることになる）。

¹ 主催は科学研究費補助金（基盤 C）「宗教学の生成とその展開に関する総合的研究」(代表 江川純一)。

² *The Varieties of Religions Experience* [VRE] , in *William James : Writings 1902-1910*, The Library of America, 1987, p.388.

³ *ibid.*

⁴ ‘science of religions’という言葉の初出は『諸相』よりも5年早い『信じる意志』（1896年）の序文である。その意味内容には若干の差異が認められるが、宗教的信仰を私事の領域に留めず、真たりうる「仮説」として扱うことを主眼とする点では、両著作における議論の趣旨は一貫している。*Will to Believe* [WB] , in *William James : Writings 1878-1899*, The Library of America, 1992, pp.445-704.

⁵ ‘What Psychical Research Has Accomplished,’ in *Essays in Psychical Research : The Works of William James*, Harvard University Press, 1986, pp.89-106. ジェイムズは1884年にイギリスの心霊研究協会（SPR）の会員となり、アメリカ支部の設立に尽力。1893年から95年までは同会の会長もつとめた。

⁶ この点については堀「心霊研究の彼方に」（鶴岡賀雄、深澤英隆編『スピリチュアリティの宗教史・上巻』リトン、2010年、201～228頁）を参照。

⁷ ジェイムズの長年にわたる心霊研究への取り組みの経緯については、以下の書物に詳しい。デボラ・ブラム『幽霊を捕まえようとした科学者たち』鈴木恵訳、文春文庫、2010年（Deborah Blum, *Ghost Hunters: William James and the Search for Scientific Proof of Life After Death*, New York: The Penguin Press, 2006）。

⁸ VRE, pp.42-3.

⁹ ‘Frederic Myers’s Service to Psychology,’ in *Essays in Psychical Research*, Harvard University Press, 1986, pp.192-202.

¹⁰ Eugene Taylor, *William James on Exceptional Mental States: The 1896 Lowell Lectures*, Amherst: The University of Massachusetts Press, 1984.

¹¹ ジェイムズはそうした「例外的」心理に強い関心を持ちつつも、それを医学的、治療的な観点から扱うことができずにいる（あるいは、せずにいる）。私見によれば、このことは彼を医者

にしたい、という父の願いに彼がどうしても答えることができなかった理由の一つと思われる。

¹² VRE, p.342.

¹³ その意味では、ここには制度化された宗教や学問の男性中心主義に対するある種の問題提起があると私は考える。しかし、一方ではまさにこうした図式化にこそ、ジェイムズの男性中心主義がある、との批判もある。Charlene Haddock Seigfried, 1996, *Pragmatism and Feminism: Reweaving the Social Fabric*, University of Chicago Press.

¹⁴ 主知主義に対するジェイムズの批判は『多元的宇宙』、特に第二講「一元論的観念論」において最も集中的に論じられている。*A Pluralistic Universe* [PU], in *William James: Writings 1902-1910*, The Library of America, 1987, pp.649-667.

¹⁵ この点については、Ellen Kappy Suckiel, *Heaven's Champion: William James's Philosophy of Religion*, University of Notre Dame Press, 1996. 私もこれを受け、以下の論文でこの点に論及した。堀「W.ジェイムズにおける「宗教の科学」と神の實在」、『哲学』第40号、北海道大学哲学会、2004年7月、17～35頁。

¹⁶ この点については前掲論文「心霊研究の彼方に」で詳述した。

¹⁷ 同論文参照。

¹⁸ 'The Psychology of Belief', in *William James: Writings 1878-1899*, The Library of America, 1992, p1045.

¹⁹ 彼はまた、後の『多元的宇宙』において、ある種の宗教的経験の特質を、「最も絶望的な瞬間の後に新たな生の領域が開かれるという現象」と述べている ([PU] p.769)。この「絶望」にもまた、二人称の死の体験を含めることも不可能ではあるまい。その場合は、ここで言われる「現象」に、霊媒現象を包摂することも可能になる（もちろん、ジェイムズ自身はここで、それを意図してはいなかっただろう）。

²⁰ Some Problems of Philosophy, in *William James: Writings 1902-1910*, The Library of America, 1987, Chapter 1(pp.985-996).